

---

# **その空に虹の橋が架かる時…**

時雨咲萤

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

その空に虹の橋が架かる時…

### 【Zコード】

N4497A

### 【作者名】

時雨咲萤

### 【あらすじ】

神と魔王の間で、戦争が繰り広げられる世の中。ゴミの中から食べ物を搔き集め、イラついた大人達から暴行を受けるのが当たり前であったスラム街での日々。その片隅でいつも少年は蹲っていた。生きる価値は無いのだろうか。だが、僕にはこの治癒の能力がある。僕は世界を救うために生まれてきたかも知れない…。一匹のニモ猫に導かれ少年は世界を救う旅へと出た。

## プロローグ

その戦争は 何故 始まったのだろうか

何故 殺しあわなければならぬのだろうか

何故 この運命はこんなにも皮肉なのだろうか

あの美しい笑顔は 何処へ消えたのだろうか

某所 。

風が哀しげに唸り声を鳴り響かせる。暗闇の中で、影が大きく動き出した。別の影は、ただじつと動く影を見つめている。

「お前は間違っている」

それは、美しく優しい女性の声である。

「世界を滅ぼしたところで、お前は何を手に入れられるか。いやそこには、何も無い。お前が今思っている“幸せ”とは、紛い物にすぎんのだよ」

そう影に言い聞かせ、女性が、その影の傍へと歩み寄った。そして、優しく影の手を取り、それを頬にそっと当てる。非常に冷たいものを感じる。女性の眸から、一筋の涙が零れ落ちた。

「お前は、これ程までに冷たくなってしまったのか」

その言葉に、影が小刻みに動く。

「皮肉なものよ。 私は知っている。お前の手は、あんなにも温かかったらう。お前は忘れてしまったのか？」

影に問い合わせるように呟き、その手を放す。ゆっくりと後ろへと退いた女性は、影の形相を見つめ強く目を瞑つた。それは、もはや人ではない。

「……すまないな。私が悪いのだ」

女性は、大きく息を吐いた。

「お前が、リオンを怨む気持ちは解つてゐる。私はお前にとつて、憎き命なのだからな。 だが、怨むなら私を怨め。私もリオンを愛したのだ」

咄嗟に、影が女性へと飛び掛つた。だが、影は女性の目の前で崩れ落ちる。その影を、女性は哀しみ溢れた眸で見下ろした。

「今のお前では、私を殺れぬ。お前の力は、徐々に封印され始めているのだ。 時期に、お前は無力となり眠りにつく」

女性が、再び大きく息を吐く。

「お前の為なのだ。わかってくれ」

冷たい風が辺りを包み込む。その唸り声は、まるで女性の心の涙のようにも聞こえる。女性は、振り返り影に背を向けると、ゆっくりと歩き始めた。

「お別れだ」

立ち止まり、影を振り向く。

「 今、私の腹の中には一人の赤子が眠つてゐる。そのうちの一人は、エラゴの血を持つて生まれてくるであろう。そして、悪魔という異名を持つ」

風が一段と不気味に唸り声を轟かせる。女性の美しく長い髪が、大きく揺れる。女性は、一息ついて静かに目を瞑つた。

「母上から聞いたのだ。彼を産み落とすことにより、私の体は弱まり、いざれ命を落とすだろう」と。だが、私はこの子達を愛している。だから、産むことを決意した。墮ちるところまで墮ちてみせ

ようではないか」

女性の眸が、陽に当たり煌びやかに輝く。

「この子達は、別々となり遠くへと飛ばされる。悪魔の子は自然の魔の道へと向かい、もう一人は神の道へと進むだらう。だがいつか、出会いの日が来る筈だ。私は、一人が幸せになることを願おう。そしてお前も、本当の“幸せ”を見つけ出してくれると良い」再び、ゆっくりと歩き始める。そして、高くある窓の向こう側の空を見上げ、語りかけるように口を開いた。

「頼んだぞ、神<sup>(ロマン)</sup>。あの神話のように、この空に人々を結ぶ“虹の橋”を架けてくれ。私は、お前を信じ愛しているのだ」

その空に虹の橋が架かる時

その世界は真実の愛を手に入れる

## プロローグ（後書き）

いちらりでも連載開始しました。

初めまして、宜しくお願い致します。

この作品は完結までとても長くなるのですが、最後までお付き合いしてくださると嬉しいです。感想等がありましたら、是非聞かせてください。

## 1話・旅立ちの時……

「 まだ歩くの? 」

隣で不機嫌そうに呟く声が聞こえる。その声を発した主を見て大きく溜息をついた。そ

の声には答えず、黙つて月の澄んだ明るい夜空の下を歩き続ける。何キロか先に見える明かりが、イースト国<sup>1</sup>の端の街『アシュベリッフィ街』への入り口だろう……。

旅を始めてもう一年か、そう考へてふと故郷を思い浮かべる。故郷と言つても、血の臭いも混ざつた悪臭が漂う薄暗いスラム街である。生まれてすぐに棄てられたのか、気がついたらそこに立っていた。空腹を満たすためにゴリラの中から食べられそうなものを搔き集め、イラついた大人達から暴行を受ける日々が当たり前であった。両親が誰であるのか、

知らうと考へたことはない。知つたところで、どうにもならないからである。棄てたことに復讐する気も、生んでくれたことに感謝する気も、全くない。ただ、古ぼけた記憶の中で、

誰かの泣き声だけが気になつていた。赤ん坊の声に聞こえるが、それが自分の泣き声なのか、もしくは、自分の兄弟の鳴き声なのか……。ひたすら、その答えを求めて考えていた。

だが、当然わかるわけがなかつた……。

そんな日々に終止符が打たれたのは、一年前 旅立ちを決意した日だった。

一年前、十一月。

僕には生まれつき、特別な能力があった。それは、怪我している人や、病に侵されてい人々を救う、治癒の能力である。だが、それとは逆に、治癒するのではなく、その痛みを重くすることもできた。そんなわけで、僕は好かれたり、嫌われていたりした。僕を嫌う人々のほとんどは、街に住む大人達だった。

今日も、スラム街の隅で、僕は一人うずくまっていた。その汚れた小さな体には、無数の傷がつけられている。その傷からは、まだ、赤黒い血が流れている。つい先程まで、イラついた大人達から暴行を受けていたのだった。頭の中で、その大人達が吐いていった言葉が、妙に焼きついで離れない。生きる価値は無い。こんな所で暮らしていればよく言われる言葉であるが、僕はその度に悩んでいたのだった。それは自分は何のために生まってきたのだろうか……。だが、その悩みの答えがどう考えても解らない事を、僕はすでに知っていた。それでも、答えを見つけようと無駄な努力ばかりしていた。

数時間そのまま考えて、ようやく立ち上がる。そして、傷ついた足を引きずりながら、ゆっくりと歩き出した。すぐそこの路地を抜ければ、大きな広場がある。中央のドラム缶と、積み上げられた土管の他には何も無い無人の広場である。僕は

いつも、そこで暮らしていった。

薄暗く狭い路地を歩いて間もなく、広場にたどり着く。そして、雨が降つていてることに気づき、積み上げられた土管の中へともべつこんだ。そこから、中央のドラム缶に視線を向ける。ドラム缶の上には、一匹の三毛猫が座っていた。このスマム街にも猫は何匹かるが、この三毛猫は初めて見る。迷い猫だらつか……。田を細めて、その猫の様子を窺う。

その視線に気づいたのか、三毛猫が弾みをつけてドラム缶から不格好に飛び降りた。黄色がかかった緑色の眸を向け、慎重に窺いながら寄つてくる。平然しているが、後ろ左足を引きずつているようである。

「 怪我、痛そうだね」

田の前で立ち止まつた三毛猫を抱き上げて、土管の中へと入れる。そして、答えるはずも無い猫に問いかけた。猫はその手から逃れようと、必死になつてもがいていたが、僕は放そうとはしなかつた。

「 骨折しているみたいだ。君はタフなんだね。かなり痛かったでしょ？」

そう言つて、三毛猫をゆっくりと座らせる。そして、不思議そうに見上げる猫の田の前で、両手を重ねて瞳を閉じた。

「 ちょっとだけ我慢してね」

そのまま、大きく息を吐く。吐き気ると同時に、その重ねた両手から、眩しい緑色の光

が射した。その光が、三毛猫の後ろ左足を覆つっていく。三毛猫は、

黙つてそれを見つめて

いた。やがて、その光は消え、僕はゆっくりと目を開いた。そして、

三毛猫に小さく笑い

かける。

「もう痛くないよ。歩いていいらん」

三毛猫はスッと立ち上がり、今度は小馬鹿にするような顔で見上げてきた。

「まずは、自分の怪我を治したらどう?」

どこからか、生意気な子供の声が聞こえてくる。誰だろう、と辺りを見回してみるが、人の居る気配は全くなかった。広場には、僕とこの猫しか居ないようである。空耳だったのだろうか……。

「そのうち、大量出血で死ぬかもよ?」

再び、どこからか声が聞こえてくる。まさか……。僕は、恐る恐る三毛猫を見た。三毛

猫は不機嫌そうに、大きく尻尾を振っている。僕の視線に気がつくと、小さく鼻で笑つて見せた。

「何、その顔? 三毛猫が喋るなんて可笑しいって言いたいの? 生憎、それは聞き飽きたよ。」

毎回言われているからね。三毛猫が喋るなんて、ロマンチックじゃないじゃん! ……って

さ

三毛猫がすねた表情で、口をパクパクと動かしている。といひことは、この三毛猫が喋ったということか。

「今、君が喋ったの?」

すかさず、三毛猫に問いかける。

「そうだよ。三毛猫で悪かつたね

三毛猫は無愛想にそう答えたが、僕は、興味津々にその猫を抱き上げた。当たり前だが、

喋る猫を見たのは生まれて初めてのことである。喋つたら面白そつ、と考えてはいたもの

の、喋るわけが無いと否定し続けてきた。

「喋る猫なんて、始めてみたよ。信じらんない……」

目を輝かせてそう言う僕に、三毛猫は不思議そうに顔をしかめて僕を見た。

「何言つてんだい？ 猫が喋るなんて当たり前のことだひうっ？」

今度は、僕が顔をしかめる。

「まさか。このスラム街には、喋る猫なんて一匹もいないよ

「それこそ、信じられないね！ 喋らない猫こそ滅多に見ないよ。

君も能力者なんだか

ら、それくらい知つてるでしょ？」

能力者。僕を嫌う大人達が、僕のことをそう呼んでいた。おそらく、特別な能力を

持つて生まれてきた者ることを、そう呼ぶのだろう。でも、僕は、その呼び名を嫌つてい

た。能力者という呼び名は、人殺しの意味でもあつたから……。

「僕は、能力者なんかじゃないよ……」

大きく首を振つて否定する。

「何言つてるんだい？ 君はさつき、能力を使つていただじやないか

「あれは……」

思わず身を引いて下を向く。

「なるほど 嫌いなの？」

その様子に気づいたのか、三毛猫が、僕の顔を覗き込む。

「え つ？」

「能力者、嫌いなの？」

三毛猫の言葉に、拳を握つて黙り込む。能力者が罪の無い人を殺している姿は、何度も

この目で見てきている。それまで、この能力は誰かを救うためにあるのだと信じていた。

だから、この能力が、人を殺すためにあるのだと知った時は、地獄を見たような感じであった。

「……僕は、この能力を人殺しになんか使いたくない。せっかく、治癒の能力を授かった

んだから、傷ついている多くの人を救いたい」

真つすぐ真剣な眸で、まるで自分に言い聞かせるように強く言つ。

三毛猫はそれを聞き、

目を細めて僕を窺つてきた。

「治癒の能力は、使い方を変えれば、人を殺すことだって出来る。

君は、どんな事が

起きても、人を殺さないと誓えるの？」

「誓える。僕は、人殺しなんかしない。争うことだけが、解決法じゃないから」

「本当に？」

三毛猫の黄色がかつた緑色の眸が、僕を見据える。やがて、小さく溜息をついて、ゆつ

くりと土管の外へと出た。いつのまにか、雨は止んでいるようである。

「……君はきっと、生きる価値があるよ。　その能力で人を救いたいのなら、僕についてきな」

「え　？」

「僕が、もつとその能力を鍛えてあげる。そうすれば、沢山の人を救えるはずだよ」

三毛猫が立ち止まり、驚いている僕を振り返つて見た。小生意気な顔つきだが、黄色がかつた緑色の眸は、真つすぐだった。その眸が、僕に問いかける。

「どうする?」

「このスラム街から出れば、もっと苦しむだけではないだろうか。  
目の前で、何人の命  
が奪われていく。そして、僕もまた、人殺し扱いされるのではない  
だろうか……。」

「風の噂で聞いたんだ。セントラル国のスラム街に、治癒の能力を  
持つた子供がいるって  
さ。僕は、興味があつたんだ。僕が……いや、世界中が求めていた  
力だから」

多くの人が、僕を求めている。僕は、傷ついてもいい。一人でも、  
その命が救えるのな  
ら。今までも、そう生きてきた。だから。

「もちろん、行くに決まってるよ。」  
僕は、世界中の人に救うた  
めに生まれてきたのだ  
から

\* \* \*

「ノエル?」

ふと、自分を呼ぶ声に慌てて我に帰る。振り向いて見ると、何メ  
ートルか先の方に、黄  
色がかつた緑色の眸をした三毛猫が、しかめ面をして座っていた。  
慌てて引き返し、三毛  
猫の前に立つ。

「何ボ～つとしちゃつてんの?ここだよ、今日泊まる宿

「ああ、ごめん。ありがとう、ミケ」

そう言って、三毛猫のミケが目の前の古い宿屋に入つっていく。そ  
の宿屋を、ノエルはじ

つくりと見上げた。屋根や壁は薙むじていて、所々が剥がれ落ちている。まるで、廃墟化した建物だ。しかし、金が無いから仕方がない」と、そう深く溜め息をついてから、ノエルはゆっくりと宿屋の中へと入った。

宿屋の中は外見と違つて、それほど古くはなさうである。床のホコリや、家具のサビなども、ほとんど畳立つものはない。おそらく、こまめに掃除をしているのだろう。ロビ

ーの中央奥にある受付を見ると、そこには、髭を生やした大きな男が立っていた。その男のもとへ行き、部屋の鍵を預かる。その際に、男はミケを怪しそうに覗き込んでいた。

男から預かった鍵で、二階にある部屋の戸を開く。一番にミケが部屋の中へ入つて、��けてノエルが入り、戸を静かに閉めた。部屋の中もロビーと同じく、こまめに掃除がし

てあるようである。また、広くもなく狭くもない。人間一人では充分な広さである。ただ、人間一人に猫一匹では、少し広いように感じられた。とりあえず、荷物を置き、

座り込んで一息つく。

「明日はどうするの?」

三枚重ねの座布団の上にまるまって、ミケが尋ねる。そのミケを横目で見て、ノエルが答えた。

「街の見学に行きたいから、ミケは休んでいて良いよ」「了解。おやすみ」

「おやすみ」

再び一息ついて、部屋の中を改めて見回す。ベランダがある」と

に気づき、ノエルは静

かに窓を開けてベランダに出た。明らかに部屋の中とは違つ雰囲気。  
冷たい風は、新鮮で

ある。空を見上げると、いくつかの小さな星が目に入ったが、然程  
美しいわけではない。

深く溜息をついて、ネオンが輝いているわけでもない真つ暗な街中  
を見下ろした。ここに  
も『平和』という文字はないのだろうか……。

旅を始めて一年。今まで沢山の所を訪れたが、どこでも戦争は起きて  
いた。ある所では、

その戦争に巻き込まれてしまつたこともある。治癒の能力を使って  
も、目の前で沢山の人  
が死んでいき、仲良くなつた友でさえも失つたことがあつた。その  
せいで、ノエルは心に

深い傷を負つていた。だが逆に、戦争を終わらせよう、という気持  
ちも湧いてくるのであ  
つた。

「 あなた、旅人さん？」

突然、隣で少女のような声がする。慌ててその声がした方を見る  
と、すぐ隣に金髪の少  
女が、笑顔でノエルを見つめて立つていた。そして、ついでに、こ  
のベランダがどの部屋  
とも繋がつていることに気がついた。

「 あたし、アリス。 あなたの名前は？」

「 ……ノエルです」

アリスが手を差し出し、お互に握手を交わす。ノエルは、改め  
てアリスを見た。長い

金髪に、まるで人形のような顔立ちをして、手足は細く色白である。  
その笑顔には、とて  
も愛敬があり、思わずつられて笑顔になつてしまつほどである。

「出身はどちら?」

「セントラル国のスラム街です。僕、棄てられたらしくて……」

そう言って、ノエルは後悔した。今までの旅の中でも、同じよう  
に答えてしまい、相手

に気を使わせてしまったことがあった。窺うよつて、アリスの顔を  
見る。

「そう。それはお気の毒ね。 アシュビッフィーは初めて?」

アリスは一瞬驚いた表情を見せたが、笑顔に戻してそう問い合わせ  
た。その反応に、ノエル

も一瞬驚いて目を見開く。それから、黙つて大きく頷いて見せた。

「それなら、明日あたしが案内してあげる」

ノエルの答えに、アリスが嬉しそうに笑顔でそう言つ。

「それは助かります。ありがとうございます、アリスさん」

「どういたしまして」

小さく御礼するノエルに、アリスが笑顔で答える。それから、ベ  
ランダの手すりに両手

をかけると、振り向くようにノエルを見た。そして、三メートル程  
下の地面へと、勢いよ

く飛び降りる。アリスは、何事もなかつたかのような表情で、軽や  
かに着地して見せた。

「アリスさん　！」

思わず息を呑んで、ベランダからアリスを見下ろす。そんなノエル  
に、アリスは得意げ  
に笑つて見せた。

「じゃあ、また明日ね　！」

\*  
\*  
\*

朝、十時頃、街中の商人達が一斉に活動を始め出す。晴天で気温も程良く、まさに、  
仕事日和である。

部屋の戸が、ドンドンと鈍い音を鳴らす。アリスが来たのだろうか。  
読んでいた本を閉じ、ぐっすりと眠っているミケを起こさないように、静かにその戸を開く。そこには、笑顔で立っているアリスがいた。

受付の男に部屋の鍵を預け、一人で街へと出る。深夜の街中とは違い、とても明るい雰囲気である。人々にも愛想があり、旅人であるノエルを見かけると、明るい笑顔で話しかけてきた。気がつくと、ノエルもこの街に和んでしまっていた。

街中の広場に出ると人々は一層賑わい、雑貨や食物を売っている露天商の店がずらりと並んでいた。よく見ると、ノエルの見たことのない珍しい食物も売られていた。その一つ一つをじっくりと見ていくと、やがて、片隅にある小さな店の前でノエルは足を止めた。

美しく透き通った丸い何かが、ノエルを惹きつける。その横でアリスは、何故かクスクスと笑っていた。

「お兄さん。これが珍しいのかね？」

露天商の老人が、アリスと同様に、可笑しそうに笑って問い合わせる。ようやく、アリスが自分で見て笑っているのだと気づき、ノエルは恥ずかしそうに赤面した。その顔を見て、アリスが益々苦しそうに笑つてみせる。「それは、やめといたほうがいいわ」ノエルの袖を掴んで、アリスが歩き出す。それから、ノエルの耳

元で付け足すように囁いた。

「見た目は綺麗なんだけどね、味は不味いことで有名な」  
賑わう広場を抜けると、まるで別世界のように、まるつきり人気のない町並みへと出た。

しばらく歩いていくと、ふと、案内をするアリスの足が立ち止まつた。その見つめる目線

の先には、白く小さな教会がある。どうしたのだろうか。アリスの顔を覗き見る。ア

リスは何故か、懐かしそうな表情をしていた。

「 小さい時、ここに住んでいたの」

町並みを歩き出しながら、よつやく、アリスが口を開く。

「正確には、隠れてた かな」

隠れていたとはどういうことだらう、と首を傾げてアリスを見る。

アリスは、小さく笑つていたが、どこか哀しそうでもある。

「ノエル君は『虹の大陸』に行つたことある?」

アリスが振り返つて問いかける。その表情には、すでに笑顔は消えていた。ノエルは、

大きく首を横に振つて見せた。 でも、聞き覚えならある。

「それなら、この戦争の始まりは知つてる?」

再び、大きく首を横に振る。今度は、全くつて程に知らなかつた。

「 この戦争は、虹の大陸にある『空白街』から始まつたのよ」

一息ついて、アリスが切り出す。

「そこに、特殊な能力を持つた一人の少年がいたの。成長していくにつれて、二人は自分の能力を試してみたいと思つようになった。でも、『狂つた政治を

立て直し、助けを求めている人を救う』という意見と、『狂つた世の中自体を滅ぼそう』といふ考えに分かれてしま

つた。

「うして、前者は『神』と後者は『魔王』と呼ばれ、次

第に世の中も二つに分

かれ、戦争を繰り広げるようになってしまった。最初は、能力なんて持つてない人が多

かつたから、武器を使って戦っていたのだけど、そのうち両方が、人々に能力を授けるよ

うになつていったの。そしたら、能力者が神側と魔王側にわかれ、お互に憎しみをぶ

つけ合いうようになつてしまつたのよ」

戦争がどうして始まつたかなんて、考へたことすらなかつた。だが、何故彼等は争つて

想いを伝え合うのだろうか。

アリスは話を続ける。

「でも、一部だけ……どちら側にもつかない者達が居たの。今はもう、二つに別れてしまつたのだけど」

そこまで言って、一息つく。

「それは、ウエポン兵器として科学者が発明した、極めて人工的な存在？」

顔をしかめて、アリスの次の言葉を待つ。だが、アリスは下を向いて、なかなか口を開かなかつた。長いこと沈黙が続き、5分ぐらい経つてから、アリスはようやく、ゆっくりと口を開いた。

「あたしも、その一人」

驚いて大きく息を呑む。そして、信じられないともいうよじ、「あたしは、兵器である自分が……人を殺せる自分が、すごく怖かつたの。何度も何度も、

目の前で哀しい眸をしているアリスを見た。

「あたしは、兵器である自分が……人を殺せる自分が、すごく怖かつたの。何度も何度も、

大きく首を横に振り、

目の前で哀しい眸をしているアリスを見た。

「あたしは、兵器である自分が……人を殺せる自分が、すごく怖かつたの。何度も何度も、

本気で死のうと思つたわ。でも、それさえも怖くて出来なかつた。

だから、あの教会

に隠れたの。戦争から、逃げてたの！」

アリスの目から涙がこぼれ落ちる。

「どうして……」

それにつられるように、ノエルの目からも、大粒の涙がこぼれ落ちる。

「どうして、戦争はそこまで苦しめるんですか？どうして？」

ノエルは複雑な気持ちだった。何よりも、その現実にショックを受けていた。兵器として

て人の手で造られ、戦争で人を殺さなくてはいけない。きっとアリスは、普通の人間として生まれたかったはずだ。

「……ごめん。なんか暗い話になっちゃったね。　どうかでお茶しようか。この近くに、  
良いお店あるからさ」

沈黙が続いたまま、アリスの後を歩いて間もなく、アンティークな喫茶店にたどり着いた。入り口の横にある看板に、『ルージュ』と大きく書いてある。

おそらく、それがこの店の名前だろう。アリスが、ゆっくりと店の戸を開くと、カウンターで葉巻を始めた若い女

が、ノエル達をすぐに出迎えてくれた。アリスと一緒にカウンターの席に座ると、若い女は後ろの棚からティーカップを一つ取り出した。  
「　アンタ達、未成年だろ？紅茶でいいかい？」

若い女は、アリスとノエルが頷くのを確認すると、フルーツの香りがほんわりと広がる

温かい紅茶を、ノエル達の目の前でティーカップに注いだ。

「コイツが、アリスの言ってた奴か？」

紅茶の入ったティーカップをカウンターに置いて、ノエルを親指で指す。アリスは、笑顔で大きく頷いて見せた。それを見て、若い女がまじまじとノエルを覗き込む。

「なかなかいい男だね。　あたしは、エフィー。アリスの保護者だよ」

「あ、どうも。ノエルです」

エフィーが手を差し出したのに気つき、お互いに握手を交わす。保護者ということは、アリスが人工的な存在であることは知っているのだろうか、そう考えてエフィーを複雑な表情で見つめ返した。

「旅してるんだって？」

「え　っ？　あ、はい」

思わず、聞きそびれそうになる。慌てるように、ノエルは答えた。「ごめんなあ、こんな街で。　あたしが小さい時は、まだここは戦地じゃなかつたんだ

けどさ。今では、毎日のように戦争が起きてるよ。あたしの息子なんて、戦争慣れしちまつてやがる」

エフィーが、カウンターに頬杖をついて深く溜息をつく。そして、何か思いつめた表情を見せた。

「息子さん、いらっしゃるんですか？」

すかさずノエルが問いかける。そのノエルに、エフィーは弱々しく笑いかけた。

「まあね。最近は反抗期で、母親扱いしてくれないけど……」

再びエフィーが深く溜息をつく。

「あ、でも、きっと、色々とエフィーさんに感謝していると思いますよ」

「ありがとう。まあ、感謝されるようなことは、いっぱいしてきたからね。感謝してくれないと困るよなあ」

エフィーが体勢を立て直し、葉巻の火を灰皿に押し当てるて消して

みせる。それから、ノ

エルとアリスの目の前に、紅茶の入ったティーポットを丁重に置いた。

「好きに飲みな。あたしは、ちょっと奥行つてるからさ。じゃ

あね、旅人さん」

そう言って、後ろ向きに大きく手を振りながら、エフィーは店の奥へとゆっくりと消えていった。

「優しい人だね、エフィーさんって」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4497a/>

---

その空に虹の橋が架かる時…

2010年10月9日22時03分発行